

出エジプト記19章 「聖別される民」

1A 祭司の王国の約束 1-6

2A 聖別の命令 7-15

1B 濃い雲の中での現れ 7-9

2B 衣服の洗い 10-15

3A 天から降りて来られる神 16-25

1B 火と煙の中の臨在 16-19

2B 近づかせない主 20-25

本文

出エジプト記 19 章に入ります。私たちはついに、出エジプト記において大きな分岐点に入っていきます。これまでは、私たちは日本語の書物の名前「出エジプト」に相応しい話、エジプトからの脱出の部分を見てきました。そして、シナイの荒野でホレブの山までモーセは、彼らを導いています。なぜなら、モーセがホレブの山で、燃える柴の中から、「あなたがたは、この山で神に仕えなければいけない。」と言われていたからです(3:12)。

世の中におけるキリスト者の生活ということで、エジプトが世を表し、そこから連れ出されるということは、世から贖い出されることを意味していたことを見てきました。そして次に大切な神の働きがあります。それは「聖別」です。聖別とは、聖く別たれることです。聖いというのは、発音が同じだけれども漢字が異なる「清い」とは、意味が違います。さんずいの青である「清い」は、汚れがあってそれを洗われた状態ではありますが、聖書の「聖い」というのは、「ある目的のために、他のものから別たれている」ということです。聖書というのは、世にある無数の書物の中から、神だけの言葉として別たれている、ということでもあります。つまり、聖別されるということは、「神のものとなって、世から別たれている」ということを表しています。

しばしばキリスト者は、このような者であると言われるのですが、「この世の中に生きるが、この世のものではない」ということです。聖くなるということは、この世から離れることではありません。しかし、この世と同じ価値観を共有するものでもありません。なので、この世のものではないのです。イエス様が、ご自身が捕まえられる直前に、父なる神に祈られた祈りがあります。「ヨハ 17:15-17 わたしがお願ひすることは、あなたが彼らをこの世から取り去ることではなく、悪い者から守ってください。わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものではありません。真理によって彼らを聖別してください。あなたのみことばは真理です。」そして使徒ペテロも第一の手紙で、「I ペテ 1:15 あなたがたを召された聖なる方に倣い、あなたがた自身、生活のすべてにおいて聖なる者となりなさい。」

聖別、あるいは聖化とも呼びますが、しばしば誤解されます。これが、私たちが行うことだという誤解です。聖別は、第一に主ご自身が私たちのために行ってくださいましたことです。「I コリ 6:11 あなたがたのうちのある人たちは、以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。」主が行われることなのです。そして、そうやって聖なる者とされたので、それを生活で実践するという順番です。私たちが、既に神がキリストの血潮によって、聖なる御霊によって行ってくださった大いなる業を、日々の歩みの中で体験していくということを醍醐味にしています。

1A 祭司の王国の約束 1-6

1 エジプトの地を出たイスラエルの子らは、第三の新月の日にシナイの荒野に入った。2 彼らはレフィディムを旅立って、シナイの荒野に入り、その荒野で宿営した。イスラエルはそこで、山を前に宿営した。

イスラエルがエジプトを脱出したのは、第一の月の 14 日です。ですから、ここにたどり着くまで二か月ぐらいかかっています。後に主は、祭りをを行うように命じられますが、過越の祭りの他に、七週の祭りというものがあまして、五旬節のことです。ユダヤ教では、シナイ山でイスラエルに律法が与えられた日として五旬節を祝います。もちろん私たちは、この時に聖霊が弟子たちに下って、教会が始まったことをお祝いする日としています。

そして今、シナイの荒野の山の前で宿営しました。この辺りは、平地になっていて 1.6 平方キロメートル、東京ドームで 35 個ぐらい入ることのできる広さです。山を取り囲んで、円形劇場のように広がって宿営していたのでしょう。

3 モーセが神のみもとに上って行くと、【主】が山から彼を呼んで言われた。「あなたは、こうヤコブの家に言い、イスラエルの子らに告げよ。

モーセがまず山に上がって行き、かつて彼が語りかけられたように、語りかけられました。イスラエルの子らのことを、「ヤコブの家」と呼ばれています。単に七十人しかいなかったヤコブの家が、今やこれだけの大人数、成年男子だけで約 60 万人にもなる民族となりました。

4 『あなたがたは、わたしがエジプトにしたこと、また、あなたがたを鷲の翼に乗せて、わたしのもとに連れて来たことを見た。

主が、どれだけご自身がイスラエルを愛し、省みておられたかを思い起こさせています。「鷲の翼に乗せて」であります。私たちがよく歌うワーシップで、「御翼の陰」というものがありますが、イスラエルの民が荒野の旅をしている時に、主がそのようにして彼らを守ってくださいましたということです。

後にモーセは、さらに詳しく主がなされたことをこのように説明しています。「申 32:10-11 主は荒野の地で、荒涼とした荒れ地で彼を見つけ、これを抱き、世話をし、ご自分の瞳のように守られた。鷺が巢のひなを呼び覚まし、そのひなの上を舞い、翼を広げてこれを取り、羽に乗せて行くように。」これは、鷺の雛を揺るがして、巢の外に出し、雛が一生懸命、羽を動かして飛ぶのですが、地上に落下していくのを、親の鷺が翼で捕えて、飛び方を学ばせている様子です。イスラエルの民が、そのようにして神から守られ、養われていたことを表現しています。水が無くなった時に、マラにおいては水を甘くし、メリバにおいては岩から水を出し、そして毎朝、マナを与えられました。そしてアマレク人には、モーセが手を上げることによって打ち勝つようにしてくださいました。このようにして、主に抛り頼むことは良いことなのだということを、少しずつ学んでいったのです。

これまで、私たちが荒野の旅を読んできましたが、同じようにキリスト者の生活、この世における生活で、神がおられなかったら自分は駄目だったという体験をしてきたのではないのでしょうか？ そのような苦境も含めて、主の翼の上に乘せられてここまでやってきたのです。

5 今、もしあなたがたが確かにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはあらゆる民族の中にあつて、わたしの宝となる。全世界はわたしのものであるから。6 あなたがたは、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。』これが、イスラエルの子らにあなたが語るべきことばである。」

主がここで、他の諸民族のことを気にかけておられます。イスラエルの民をご自分の民として、他のあらゆる民族の中にあつて、特別な存在にしようとしておられます。そもそもが、アブラハムに対して神が約束をしておられましたね。「地のすべての部族は、あなたによって祝福される。(創世 12:3)」アブラハムの子孫が大いなる国民になることによって、他のすべての部族が祝福を受けることを、神は約束しておられました。つまり、主に救われる、贖われるということは、そのまま他の人々に対して、主にある祝福となっていくことを意味しています。ここの創世記の箇所が、ガラテヤ書でパウロが引用して、アブラハムの子孫であるキリストによって、すべての人が祝福を受けることを説いていますが、そうです、私たちが救われるということは、自分自身が神のものになっただけでなく、一般の人々の前で、またその間で祝福になることを意味しています。自分が受けるだけでなく、受けたものを分かち合うことによって、人々への祝福となる仲介となるのです。

アブラハムは、信仰によって義と認められました。空に輝く星々を見たとき、「あなたの子孫はこのようなになる」と主に宣言されて、それを信じて義と認められました。けれども、彼のその信仰は、主に聞き従うという、その従順によって明らかにされました。アブラハムが、独り子イサクを全焼のいけにえとしてささげること、疑うことなく行おうとしたところに、アブラハムが全幅の信頼を神に寄せていたことが表れたのです。行いによって救われたのではなく、行いのない時に信仰によって救われたのですが、行いと共にその信仰が現れました。それと同じように、神は今、イスラエルに

対して、「もしあなたがたが確かにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら」と言われたのです。主の御声に聞き従うことによって、確かに宝の民であることを世に示すこととなります。

ここに「契約」とありますが、これを 24 章で、モーセがいにえの血をイスラエルの民に振りかけることによって、神と結ばせました。これを、モーセの契約と人々は呼び、ずっと後にエレミヤの預言によって、モーセの契約に代わって、新しい契約を結ぶと主が約束してくださいました。律法を守り行なうことができず、呪いを自分たちにもたらしてしまったイスラエルの民ですが、しかし主が、ご自身で律法を一人一人の心に置いて、彼らが聞き従うことができるようにすると約束されました。

「わたしの宝となる」という約束があります。主ご自身にとって、イスラエルの民が宝、貴いものとなります。そして全世界がご自身のものだからと言われてはいますが、イスラエルをご自分にとって貴いものとすることによって、全世界にとって彼らが祭司になることができるように、ということです。

「わたしにとって祭司の王国」とあります。祭司とは、神と人を取り持つ仲介者です。神の前に人を代表して出て行き、人の前に神を代表して出て行きます。神への礼拝と奉仕を保つことによって、その恵みと祝福を人々に伝え、分け与えることとなります。イスラエルの民がそれぞれ、主の前に出て行って、そして彼らが主をあがめることによって、そこに神を王とする王国ができ、祭司たちの集まりによる、神の国がそこにできます。そして広がります。そして、まだ神を知らない人々が神を知るために召されているということです。そして、「聖なる国民」というのは、他の国々とは異なる、神のために別たれている民ということです。

ペテロは、これを教会の者たちにも当てはめています。「I ペテ 2:9 しかし、あなたがたは選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神のものとされた民です。それは、あなたがたを闇の中から、ご自分の驚くべき光の中に召してくださった方の栄誉を、あなたがたが告げ知らせるためです。」ここから何がわかるでしょうか？ 私たちは、自分が神の恵みを受けるだけでなく、それを分かち合う使命を受けているということです。一人一人が、主の前に立つ霊的な祭司です。神への礼拝と奉仕は、一人一人の信者の務めです。ここが、自分だけの自分しかみていない、悪い個人主義が入り込むと、この使命に応答できなくなります。自分は自分だけのものではない、そして神への礼拝は、自分だけのものではないのです。神の前に出ることによって、その礼拝によって、今度は自分自身が人々への祝福となります。そして、王国とあるように、私たちの中でキリストが主として、あがめられていなければいけません。神の国が霊的に、私たちの中で広がっているからこそ、人々に光を伝えることができます。教会生活がいかに大切かを、ここで知ります。

2A 聖別の命令 7-15

1B 濃い雲の中での現れ 7-9

7 モーセは行って、民の長老たちを呼び寄せ、【主】が命じられたこれらのことばをすべて、彼らの

前に示した。8 民はみな口をそろえて答えた。「私たちは【主】の言われたことをすべて行います。」それでモーセは民のこぼを携えて【主】のもとに帰った。

主の言われたことに対して、「私たちは【主】の言われたことをすべて行います。」と彼らは同意しました。これで契約を結ぶ整えができました。彼らが主の命令に聞き従うという従順が、この契約では条件ですから、その条件を彼らが飲んだわけです。これが、古い契約と呼ばれるモーセ契約と、今の新しい契約の大きな違いです。彼らが聞き従うことをしなかったということに基づいて、主が一方的に、ご自分の真実に基づいて契約を結ばれたのが、新しい契約です。私たちの従順に基づくのではなく、神の真実に基づく契約です。

9 【主】はモーセに言われた。「見よ。わたしは濃い雲の中にあつて、あなたに臨む。わたしがあなたに語るとき、民が聞いて、あなたをいつまでも信じるためである。」それからモーセは民のこぼを【主】に告げた。

聖書の中で、主の栄光と雲が密接に関わっています。後にできる幕屋、また神殿において、栄光の雲が満ちました。そしてすでに雲の柱によって、主はイスラエルを導いておられました。そしてイエス様は、雲に乗って地上に戻ってくると約束されています。ですから「濃い雲」とは、主ご自身がその全ての栄光を携えて臨むという強い意志の表れです。

そして、その栄光の中で、民が主の御声を聞いて、モーセの語る神の言葉を信じるためなのだと言っています。主の栄光を見る者が、初めて主の声に聞き従えると言えるでしょう。主ご自身を知る者が、真にへりくだりの心が与えられ、そして言われることに素直に聞くことができるでしょう。主の栄光を見ない者は、言われたことを聞きはしますが、そのプライドがあるので、結局、聞き従うことはできません。

2B 衣服の洗い 10-15

10 【主】はモーセに言われた。「あなたは民のところに行き、今日と明日、彼らを聖別し、自分たちの衣服を洗わせよ。11 彼らに三日目のために準備させよ。三日目に、【主】が民全体の目の前でシナイ山に降りて行くからである。

主が天から地に降りてこられます。天におられる方が、その栄光と力をもって地上に来られます。このことによって、数多くの預言書において、主が到来する時の姿として、ここの箇所が原型、モチーフになって表れています。私たちは、これが主が初めに来られる時ではなく、再臨の時にそうなることを知っています。

ここで大事なものは、「三日目」という言葉と、「衣服を洗う」ということです。三日目というならば、そ

れはイエス様が三日目に、死者の中から甦られることを思い出しますね。そうです、主が神の力と栄光の現れとして、死者の中から甦られました。そして、「衣服を洗う」ことですが、これは象徴的な行為です。黙示録 19 章において、「輝きよい亜麻布」を聖徒たちが身にまとっている姿がでてきます。また、他の箇所でも、白い衣を身にまとっている者たちの姿が出てきます。それは、「聖徒たちの正しい行いである」とあります(8 節)。主の前に聖なる者とされた姿であります。イエス様の復活によって、私たちが主の前に恵みによって、義とされている状態です。私たちが礼拝において、主が復活されたことを覚え、そして神の前で恵みによって義と認められたことを知ること、それが、聖別に必要なことです。

12 あなたは民のために周囲に境を設けて言え。『山に登り、その境界に触れないように注意せよ。山に触れる者は、だれでも必ず殺されなければならない。13 その人に手を触れてはならない。その人は必ず石で打ち殺されるか、矢で殺されなければならない。獣でも人でも、生かしておいてはならない。』雄羊の角が長く鳴り響くときは、彼らは山に登ることができる。」

主が降りて来られるにさいして、「周囲に境を設け」ということです。これは、アダムが罪を犯したために、人が墮落し、被造物も呻きの中に入っていることを物語っています。アダムとエバがエデンの園から追放されました。そのために、神との間に仕切りができました。主は聖なる方であり、そのままの姿では決してこの方の前に行くことはできないということです。

神に愛されていたダニエルでさえ、栄光の主の姿にまみえた時に、死んだようになってしまいました。ユダの罪を咎め預言していたイザヤは、栄光の主の幻を見た時に、「ああ。私は、もうだめだ。(イザヤ 6:5)」と言いました。栄光のイエス様の姿を見たヨハネも、死人のようになってしまいました(黙示 1:17)。人間的には非の打ちどころがないと思われる人でも、神の完全性に触れるや、このようになってしまうのです。したがって、私たちは絶えず、キリストが流された血を思い出して、この方のゆえに聖所の中に入ることができるのだということを思い出さないといけません。

ただし、「雄羊の角が長く鳴り響くときは、彼らは山に登ることができる」とあります。これは興味深いです。主からの号令が鳴り響くときは、聖徒たちは山に上がっていくことが許されます。教会が引き上げられる携挙のことを思い出してください。「I テサ 4:16-17 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」私たちが、このようにして主と空中で会うことができる、引き上げられることになることを思うことによって、私たち自身が清められます。(I ヨハ 3:2)

14 モーセは山から民のところを下りて行って、民を聖別した。彼らは自分たちの衣服を洗った。

15 モーセは民に言った。「三日目のために準備をなさい。女に近づいてはならない。」

民がモーセの言うとおりにして、それから「女に近づいてはならない」と言っています。これは、結婚している妻のことです。ですから、決して道徳的に汚れていることではなく、象徴的にそういった意味合いを持ちます。自分は主にのみ仕えることを示しています。日常行っていることで、それ自体は決して汚れたものではありません。しかし、黙示録で 14 万 4 千人が主によって選ばれました。そして、こう書いてあります。「14:4 この人たちは、女に触れて汚れたことがない者たちで、童貞である。」主にのみ仕えることを、象徴しているのです。

私たちは、主にお会いする時に、当然行っていて良いことも控えるということがあります。主に捧げるというのは、主を愛するという動機のゆえに、自分の権利さえも下ろすということです。礼拝のために、いろいろなことを犠牲にするでしょう。やめることもできます。それら一つ一つは、それ自体何の悪いことではなく、良いこともたくさんあります。しかし、主のゆえにそういったことも捧げるのです。

3A 天から降りて来られる神 16-25

1B 火と煙の中の臨在 16-19

16 三日目の朝、雷鳴と稲妻と厚い雲が山の上にあって、角笛の音が非常に高く鳴り響いたので、宿営の中の民はみな震え上がった。17 モーセは、神に会わせようと、民を宿営から連れ出した。彼らは山のふもとに立った。18 シナイ山は全山が煙っていた。【主】が火の中にあって、山の上に降りて来られたからである。煙は、かまどの煙のように立ち上り、山全体が激しく震えた。19 角笛の音がいよいよ高くなる中、モーセは語り、神は声を出して彼に答えられた。

「雷鳴と稲妻と厚い雲」これらは、神の畏れ多い姿、その偉大な力を表しています。詩篇には、雷鳴や稲妻によって、神ご自身の威光を表すことが、活き活きと表現されています。(例:詩篇 18:7-14) 雲については、幕屋を造った後に雲が満ちて、そこが暗くなることを伝えています。ソロモンは、「I 列王 8:12 主は、黒雲の中に住む、と言われました。」と言っています。

そして、宿営の民は震えあがっています。それもそのはず、罪ある人間にとっては天にある神の栄光は火の裁きの現れに他なりません。黙示録を見ると、この表現が数多く出てきます。ラッパによる裁きが地上に下る時に、似た現象が起こっています。「黙 8:5 それから御使いは、その香炉を取り、それを祭壇の火で満たしてから地に投げつけた。すると、雷鳴と声かとどろき、稲妻がひらめき、地震が起こった。」そして、角笛が鳴っていますが、御使いが共に降りて来る時に、角笛がなっていると考えられます。ステパノが説教をした時に、「あなたがたは御使いたちを通して律法を受けた(使 7:53)」と言っています。ガラテヤ 3 章 19 節にも書いてあります。そしてシナイ山の全山で煙が立っていますが、これもヨエル書にもあり、「2:30 わたしは天と地に、しるしを現れさせる。

それは血と火と煙の柱。」とあります。主が戻って来られる時の地上を裁かれる時の姿です。ですから、このシナイ山における主が降りて来られる姿が、再臨の姿の時に重なるのです。そのような中で、角笛がいよいよ高くなっている時に主がモーセに語られます。

ですから、肉なる者がそのまま神に近づくことができないことは、これでよくお分かりになると思います。私たちは、神の一方的な贖いと、それを受け取る信仰によらなければ、決して神に近づくことはできないのです。信仰によって聖められ、正しいとみなされた者たちにとって、この方の現れは歓喜に満ちたものでありますが、なぜなら、罪は取り除かれ、ただ神の恵みの栄光が現れるだけだからです。そこにある報いは称賛の報いであり、罪の定めから救われています。しかし、そのままの姿、肉なる者が主の栄光を見るならば、その場で死んでしまうのです。主が復活されたその日、御使いが地震とともに現れた時に、番をしていたローマ兵が死んだ者ようになったのを思い出してください。少しご自身の栄光を表したらそうなるのです。ゼカリヤ書には、主の到来によって「14:12 彼らの肉は、まだ足で立っているうちに腐る。彼らの目はまぶたの中で腐り、彼らの舌は口の中で腐る。」とあります。

ですから、私たちが受けるバプテスマは、厳かなものです。水に浸されますが、それは第一ペテロによりますと、ノアの時の洪水と重ね合わされています。水によって生きる者が滅ぼされました。しかし箱舟はキリストの救いを表しています。私たちも水によって滅ぼされなければいけない存在でしたが、キリストと共に死に、葬られたことによって、共に甦り、そして生きることができるのです。

2B 近づかせない主 20-25

20 【主】はシナイ山の頂に降りて来られた。【主】がモーセを山の頂に呼ばれたので、モーセは登って行った。21 【主】はモーセに言われた。「下って行って、民に警告せよ。彼らが見ようとして【主】の方に押し破って来て、多くの者が滅びることのないように。22 【主】に近づく祭司たちも自分自身を聖別しなければならない。【主】が彼らに怒りを発することのないように。」23 モーセは【主】に言った。「民はシナイ山に登ることができません。あなたご自身が私たちに警告して、『山の周りに境を設け、それを聖なるものとせよ』と言われたからです。」24 【主】は彼に言われた。「下りて行け。そして、あなた自身はアロンと一緒に上れ。しかし、祭司たちと民は、【主】のところに上ろうとして押し破ってはならない。主が彼らに怒りを発することのないように。」25 そこでモーセは民のところに下りて行き、彼らに告げた。

これだけ恐ろしい光景であるにもかかわらず、またモーセが上ってくるなという主の命令を伝えていたにも関わらず、それでも上ってこようとしている姿をここで見ます。モーセは、彼らに伝えたからそんなことをするはずがないと思っていますが、主は一人一人の心を全てご存知です。人が主の命じられたことを守らない方向に動いていくその性向を知っておられるのです。覚えていますが、アロンの息子二人が、主に命じられたのではない異なる火を捧げたので、その火によって焼

かれて、その場で死んでしまいました。

ちなみに、ここで「祭司たち」と言っていますが、まだアロンとその直系による祭司ではなく、24章5節に若者たちが、全焼のいけにえと交わりのいけにえを捧げるようにモーセがさせているので、その人たちのことであろうと思われます。けれども彼らであっても、今ここに上って来てはいけないのです。主に召された者のみ、つまりモーセ自身とここではアロンですが、二人のみがそこに上るように命じられています。これは、彼らが霊的に優れているからではなく、ただ主が命じられていること、召されているからということだけで、彼らがその中に入るのです。これが、私たちの道であるとも言えるでしょう。主に命じられて、立てられているということのみで、自分は主の前に立つことができます。そうではないのに、自分自身で立ち入ろうとするならば、神の裁きを受けなければいけなくなります。なので、主に何と語られているのか、御霊に導かれることがいかに大切かを思わされます。

以上ですが、これから主が民にも聞こえる形で十の戒めを語られます。それは、単なる規則ではなく、主の栄光と聖さの中で語られた言葉であることがわかりますね。